

# 琉球大学学術リポジトリ

## Usefulness of separately evaluating lymphatic and venous vessel invasion in cervical adenocarcinoma

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: University of the Ryukyus<br>公開日: 2021-04-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Taira, Yusuke, 平良, 祐介<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/48289">http://hdl.handle.net/20.500.12000/48289</a>   |

(別紙様式第3号)

学位論文

論 文 要 旨

論 文 題 目

Usefulness of separately evaluating lymphatic and venous vessel invasion

in cervical adenocarcinoma

(子宮頸部腺癌において脈管侵襲をリンパ管と静脈に区別する有用性について)

氏名 平良 祐介 (印)

論 文 要 旨

胃癌や大腸癌、乳癌などの癌種では、リンパ管と静脈の侵襲を区別して評価することがリンパ節転移や遠隔転移などの再発部位や予後を予測する因子となることが知られているが、婦人科癌においては脈管侵襲を区別して評価する意義が確立されていない。子宮頸癌においては免疫組織化学染色によりリンパ管と静脈を区別した検討はなく、中でも子宮頸部扁平上皮癌に比べて放射線療法や化学療法に対する感受性が低く、手術療法による利点が大きい子宮頸部腺癌において、脈管侵襲の有無を免疫組織化学染色を用いて区別して評価した。1993年1月から2017年4月までの期間に当院で広汎子宮全摘出術を施行した子宮頸部腺癌108症例で、H&E-Victoria blue 二重染色で静脈侵襲、D2-40でリンパ管侵襲を評価し、再発の有無、再発部位、予後を診療録から後方視的に検討した。年齢の中央値は46.0歳、観察期間の中央値は60.5カ月であった。病期は現行の規約



に再分類し、I B1期 82例 (75.9%)、I B2期 17例  
 (15.7%)、II A1期 1例 (0.9%)、II B期 8例 (7.4  
 %)であった。組織型は腺扁平上皮癌 16例 (14.8%)、腺癌 92例 (85.2%)であり、子宮頸部間  
 質浸潤は2/3より浅い症例が69例 (63.9%)、2/3よ  
 り深い症例が39例 (36.1%)であった。骨盤内  
 リンパ節の郭清数の中央値は25個 (101症例)  
 で、骨盤内リンパ節転移は16例 (14.8%)に認  
 めた。術後再発リスクのため術後補助療法を  
 行った症例は全50例 (46.2%)で、全身化学療  
 法を行った症例が38例 (76.0%)、放射線治療は  
 12例 (24.0%)で施行された。再発を22例 (20.4  
 %)に認め、骨盤内再発のみが9例 (40.9%)、  
 遠隔再発のみが8例 (36.4%)、骨盤内と遠隔の  
 同時再発が5例 (22.7%)であった。再発まで  
 の期間の中央値は20.5カ月であった。予後は無  
 病生存が92例 (85.2%)、担癌生存が7例 (6.5%)  
 、原病死が9例 (8.3%)であった。脈管侵襲  
 は42例 (38.9%)に認められ、リンパ管侵襲と  
 静脈侵襲の有無で4群に分類し、脈管侵襲が

ない症例 (ly(-)v(-)群) は 66 例 (61.1%)、リンパ管  
 侵襲のみ陽性 (ly(+)v(-)群) が 24 例 (22.2%)、静脈  
 侵襲のみ陽性 (ly(-)v(+)) である症例が 7 例 (6.5%)、リンパ管と静脈侵襲の両方が陽性 (ly(+)v(+)) 群) の症例が 11 例 (10.2%) であった。5  
 年無病生存率は ly(-)v(-)群で 92.2%、ly(-)v(+)) 群で 34.3%、  
 ly(+)v(-)群で 66.9%、ly(+)v(+)) 群で 53.0% と、いずれも ly(-)v(-)群と比較して有意に再発率が高値であった。  
 5年生存率も ly(-)v(-)群で 98.5%、ly(-)v(+)) 群で 83.3%、  
 ly(+)v(-)群で 75.0%、ly(+)v(+)) 群で 72.7% と、ly(-)v(-)群と比較して有意に短縮していた。多変量解析では  
 無病生存率と全生存率の予後因子は進行期とリンパ節転移であり、脈管侵襲はリンパ管、  
 静脈いずれも独立した予後因子にはならなかったが、再発部位とリスク因子の検討では、  
 静脈侵襲が遠隔再発のリスク因子であった。  
 子宮頸部腺癌において脈管侵襲をリンパ管と静脈に区別して評価することは遠隔再発のリスク因子評価のために有用である可能性が示された。